
プラグ イン ベイビー

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラグ イン ベイビー

【Nコード】

N1077N

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

人は誰しも、接続コネクタを有してる。しかしながら、そのコネクタ自体の形状も、それを介してやり取りされる情報の周波数も、何もかもが人それぞれ、千差万別だ。誰もがコネクタを持っていないから、誰も繋がる事が出来ない。幻想の希望を抱いて、今日もただ足を一歩前へ進めるだけの旅だ。

僕の首筋の後ろにはコネクトプラグがある。
無論、比喻だ。

僕は自分と人とを接続する為の回路を持っている。

しかし僕以外の誰も、自分と人とを接続する為の回路を持ってない。

だから結局、僕は誰とも繋がる事が出来ない。

誰とも繋がる事は出来ないのに、首筋の後ろには確かにコネクトプラグがある。

だから、ついあらぬ期待を抱いてしまう。

いつか、自分と対になる相手が現れるんじゃないかって、そんなことを妄想してしまう。

けれど、幾ら待ってみても、そんなものは現れない。

かざしたコネクトプラグの穴から、小さな砂の粒がそっと入り込んできて、気づいたら頭はざらざらした暗い考えで満たされてる。

体内に混入したそのせいで、なんとなくぼんやり混濁した視界でものを見ながら、修復作業に相応分の年月を費やす。

稀に、身体どこかに、僕のそれと似たような形の機関を備えた個体と出会う事がある。

僕は夢中になって、彼や彼女のその機関に、コネクトプラグを差し込む。

けれど、信号は正しくとどかない。

周波数が違うのだ。

交わされる意味不明な記号の羅列の中に、規則性と意思の存在を探す。

けれど、見つからない。

きっと、それは存在してるんだろう。

ただ、その存在を、形として正しく認識できない。

その交信はただひたすら、お互いに混乱と混沌ばかりをもたらす。

僕らの行為は、通じ合うための試みから、通じ合えない、という事実の確認に変わる。

ふとした拍子に、膨張した期待感が破裂する。

きつかけなんてこの際大した問題じゃない。

それがどんな小さな針でも、膨張した風船を割るには十分なのだ。

破裂した後には、不愉快な耳鳴りと「それは確かにあった」という痕跡だけがそこに残される。

交信に使用した記号の羅列は、頭の中で時間をかけてゆっくり粉々に分解されていく。

それはまるで砂だ。

プラグをかざしてた頃に、穴から入り込んでざらざらと耳障りな音を立てていた、あの砂だ。

大概にして、僕の状態はそれと出会う前よりもっと悪くなってる。

何度かそんなことを繰り返して、どれだけ悪くなったのか、多分自覚出来ている以上には悪いんだろうと思う。

手にしたマークシートのうちの、当初期待の値が記されていた箇所
のほとんどが、失望の値で塗り替えられた。

砂が視界を覆うけど、その砂は角膜の外側を舞う砂粒なのか、それ
とも角膜の内側で踊る影なのか、その判断がもつつかない。

足に疲弊感があるから、随分な距離を歩いたんだろうと思う。

振り返っても、おぼつかない足跡の羅列は砂の海のどこかで消えて
しまってるから、正確な距離は把握できない。

ただ、疲弊感がある。

孤独も、期待も、嬉しさも、悲しさも、何もかもを飲み干すくらい
の、鈍く、鋭く、重く、それでいて浮遊感をも伴う疲弊感だ。

それは、三日三晩寝ないで活動が続けた後の夕暮れ時に、不意に現
れて、強引に意識を持っていこうとする、強烈な眠気に似てる。
とてもとても抗い難いのだ。

足が止まる。

かざし続けたコネクトプラグが砂で埋まってる事に気づいたのだ。
砂を払い落とそうとするけれど、手が思うように動かない。

疲弊感。

ここで突っ伏して、そのまま眠ってしまいたい気持ちになる。
でも駄目だ。

それも出来ない。

網膜が砂で埋まってしまってるから、スクリーンにはいつだって思
い出が映し出されてる。

昔駅で出会ったホームレスのおっちゃんと、一緒にコンビニの裏で残飯を漁った。

おっちゃんは「おめえ、若いんだから肉食えよ、肉！」なんて言っ
て、栄養価の高そうな弁当を多めに僕に寄越してくれた。

僕が個人的な事情で、廃棄弁当が業者に回収されるまでの間に取
りにいけなかった時は、おっちゃんが僕の分まで拾っておいてくれて、
それを袋に入れて近くのアパートの脇においてくれた。
やっぱり、肉の入った弁当がそこにも入ってた。

腐りかけた弁当の味は本当に最悪だった。

今でも忘れられない。

きつと、ずっと忘れられない。

だから、立ち止まる事は出来ない。

日が沈む頃には、別のシーンが映し出されてる。
映し出されてるのは、僕を殴り倒した男の姿だ。

駅前の路上で、僕が歌を歌っていたら、向かい側のあたりで、とて
もへたくそなヤンキーが尾崎豊を歌ってた。

あまりに下手すぎて、僕はついからかってやりたくなった。

僕は彼の歌を真似して歌った。

しばらくして、彼がギターをしまつて、仲間を数人引き連れて僕の
ところにやってきた。

僕は腕をガチガチに固められて、路地裏まで連れてかれた。

僕は怖くなって、泣きながら謝った。

助かりたくて、土下座だって余裕の勢いで謝った。

リーダー格の金髪の男が僕の顔をおもいつきし、一発殴った。
殴って彼はこう言った。

「お前、そんなんじやお前の歌、誰にもとどかねえよ。
そうじゃねえだろうがよ。」

お前が音楽でしたいのは、そういう事じゃねえんだろうがよ！
お前は音楽で何が伝えたいんだよ！！」

つて、僕の目を真っ直ぐ見据えて、彼は言った。

どうしようもない馬鹿は、一発殴って叱りつけなきゃいけない事も
時にはあるって、その時初めて本当に理解した。
優しい人間がいる事を、その時初めて理解した。

鼻血は出るし、ファンの子の前で恥かかされるし、結局警察呼ばれ
て皆で署まで連行されるし、本当に最悪な夜だった。
今でも忘れられない。

あの時の彼の眼差しを、きつとずっと忘れられない。

だから、立ち止まる事は出来ない。

内側を砂で満たされて、歩調に合わせてだらしなく揺れるコネクト
プラグは、多分もう使い物にならない。

だけど、立ち止まる事は出来ない。

真実がどこにあるのか、僕には分かってしまってるから、立ち止ま
るわけには行かない。

足を止めようとするたびに、そのスクリーンには真実が映し出される。

人々が不意に一瞬だけ僕に見せた、インチキじゃない、本当の表情がそのフィルムには刻まれてる。

どれだけ目を背けても、躍起になってそれを否定しても、それが真実である事を僕の心は既に理解してしまってる。

だから、立ち止まる事は出来ない。

旅の終わりが明日であっても、僕は明日までを歩き続けるだろうし、それが50年後であっても、多分歩き続ける。

人と人が繋がるためのプラグを、僕は有している。

もし僕以外の誰もそれを持っていなくても、僕には歩く理由があるのだ。

それは僕以外の第三者にとって、聴くに堪えない戯言であっても、笑っちゃうほどくだらない与太話であっても、その一つ一つが、僕にとって疲弊で鈍った足を一步前へ進めるために必要な動力なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077n/>

プラグ イン ベイビー

2010年10月21日16時45分発行